

# 投稿論文の書式、注、参照文献について補足(内規)(推奨)

## (英語教育学論文用)

平成 29 年 1 月 1 日施行

### 1. 書式、字体、枚数など

	英語論文	日本語論文
英数字、マルカッコ、コンマ、コロンの後、セミコロン、ピリオド	<ul style="list-style-type: none"> <li>全て半角文字を使用する。</li> <li>コンマ、コロンの後には半角 1 文字分のスペースを空ける。</li> <li>文末のピリオドの後には半角 2 文字分のスペースを空けて次の英文を始める。また、段落の初めは半角 5 字分のスペースを空ける。</li> <li>カッコの前後には半角 1 字分のスペースを入れる。例(地の文) : Brown □ (2015, p. 321) □ discusses....</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全て半角文字を使用する。</li> <li>英文の引用をする場合、コンマ、コロンの後には半角 1 文字分のスペースを空ける。文末のピリオドの後には半角 2 文字分のスペースを空けて次の英文を始める。また、段落の初めは半角 5 字分のスペースを空ける。</li> <li>日本語の地の文においては、カッコの前後には基本的にスペースを入れない。欧文と和文の境目も同様にスペースを入れない。但し、地の文及び参照文献表で文献に言及する際は、年号を示すカッコの前に半角 1 字分のスペースを入れる。 例(地の文) : 「鈴木□(2008)では、...」 例(参照文献) : 「鈴木繁幸□(2008)「英字新聞ヘッドラインで使用されるレトリックについて—スポーツ欄を考える」『日本英語英文学』No. 17, 17-28.」(下記、「2. 注、参考文献など」も参照のこと)</li> </ul>
一重カギカコ(「 」)、二重カギカコ(『 』)、ヤマカッコ(< >)	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的に使用しない(が、どうしても使用せざるを得ない場合には全角文字を使用する)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全角文字を使用する。</li> </ul>
原稿の 1 ページ目	<ul style="list-style-type: none"> <li>論文タイトルは、太字、センタリング(中央揃え)。3 文字以下の前置詞、</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語論文と同じ。</li> </ul>

	<p>接続詞、冠詞を除くすべての語頭を大文字にする(例: During, on, the, When)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>その後、1行アケで本文を始める。</li> </ul>	
スペース	<ul style="list-style-type: none"> <li>各節、注、参考文献、例文の前後は1行空ける。</li> <li>パラグラフの冒頭は5スペースインデントする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語論文と同じ。</li> </ul>
注	<ul style="list-style-type: none"> <li>punctuation の後に、“In the process of debating,<sup>1</sup> we are able to learn logical thinking and critical thinking.”<sup>2</sup>のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>句読点の後に、「…と考えられる。<sup>1</sup>しかし、Iwamoto (2015)では、<sup>2</sup>…」のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとする。</li> </ul>
見出し番号	<ul style="list-style-type: none"> <li>Introductionは(0節からではなく)1. Introductionのように、1節から始める</li> <li>小節番号は、3.1. Strict Identityのように、数字の後にピリオドを置く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「はじめに」あるいは「序論」は(0節からではなく)「1. はじめに」のように、1節から始める。</li> <li>小節番号は、「3.1. 代案」のように、数字の後にピリオドを置く。</li> </ul>

## 2. 引用方法

英語論文
<ul style="list-style-type: none"> <li>本文中の引用では、著者名の後ろに、出版年(と引用したページナンバー)を入れる。</li> </ul> <p>Indeed, the introduction of these skills was considered one of the efforts to westernize Japan (Suzuki, 2008).</p> <p>According to Matsumoto et al. (2009), debate is used to discuss an issue between affirmative and negative sides in order to persuade listeners logically.</p> <p>In a recent study of language learning motivation, Brown (2015, p. 321) discusses gender-related differences in learning foreign languages.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他者の著作物の記述をそのまま引用する直接引用の場合、引用文が40語未満であれば、以下のようにダブルクォーテーションマークで文中に組み込み、引用箇所最後にページ番号を沿えてカッコでくくる。引用箇所の文末にはピリオドを付記せず、ページ番号のカッコの外に付記する。</li> </ul>

According to these results, Smith (2010) suggested that the “aptitude is the fundamental part of language learning for many Japanese learners of English” (p. 301).

- 引用が 40 語以上の場合は、5 スペースインデントし、以下のように引用する。

Learners who lack motivation in the survey appeared to possess very high language anxiety and low intrinsic motivation and needed extra attention and praise for what they could do and what they were good at, which they do not usually receive from teachers (Smith, 2010, p. 302).

- 複数の著者を引用する場合

- ・ 2 人以内の場合、本文中の引用箇所では、著者全員を常に列記する。

- Iwamoto and Shibuya (2015)

- ・ 著者が 3 人以上且つ 5 人以内の場合、初出の引用箇所では著者全員を列記し、2 回目以降は、第 1 著者名のみ表記し、et al. で省略する。

- 最初の引用箇所 → Iwamoto, Shibuya and Suzuki (2015)

- 2 回目以降からの引用箇所 → Iwamoto et al. (2015)

- ・ 著者が 6 人以上いる場合、初出から第 1 著者名のみを表記し、et al. で省略する。

- 最初の引用箇所 → Iwamoto et al. (2015)

- 地の文においてカッコ内で列記する場合

(例) ... such a perspective (e.g., Harter, 1999).

(例) ... developmental aspects (Holec, 1981; Wenden, 1991).

(例) ... in the traditional L2 classrooms (Neugebauer, 2011).

#### 日本語論文

- 本文中の引用では、著者名の後ろに、出版年(と引用したページナンバー)を入れる。

成田 (2013)は、特に日本語と英語のように言語系統も累計も違い、文法と語彙に共通性が全くない外国語を習得する場合、未習の文法的な特徴に気づくには、全般的な文法知識が必要であるとしている。

この分類に従えば、日本の学校英語教育の英語が EFL に属するという事は明らかであり、シンガポール、パキスタン、その他多くの国々に見られる ESL とは性格を異にすることがわかる(大谷, 2013, p. 55).

- 他者の著作物の記述をそのまま引用する直接引用の場合、短い引用(目安として、3-4 行以内)は、一重カギカッコ(「 」)で囲み、地の文に組み込み、(直後に)カッコ内に典拠の個所を示

す。

外山 (1984)は「わが国の英語英文学界の誇るべき業績の1つに英文解釈法の確立がある」(p. 137)と  
言い切っている。

山田 (2006, p. 168)は、バイリンガルの共通基底能力とは、「言語を客体化する能力」すなわち「言  
語によって言語を観察しコントロールする能力」であり、最初から備わっているわけではなく育て  
るものであるとしている。

- それ以上の長さにわたる長い引用の場合、改行のうえ、5 スペースインデントし、以下のよ  
うに引用する。

菅原 (2011)は以下のように論じている。

現在の教育制度の枠組みを考えた場合、教室における英語学習だけで英語が話せるようにな  
ると考えるのは無理があるし、学校の教室では「話す」ことよりも優先して教えるべきことが  
あるはずだ。まずは基礎的な英語力を身につけ、直読直解のプロセスを訓練することが大事  
である。話すことはそのあとでよい。そのほうが、長い目で見れば話す力も伸びてくるはず  
である。  
(菅原, 2011, p. 224)

- 複数の著者を引用する場合
  - ・ 2 人以内の場合、本文中の引用箇所では、著者全員を常に列記する。  
→ 岩本・渋谷 (2015)
  - ・ 著者が 3 人以上且つ 5 人以内の場合、初出の引用箇所では著者全員を列記し、2 回目以降  
は、第 1 著者名のみ表記し、「他」で省略する。  
最初の引用箇所 → 岩本・渋谷・鈴木 (2015)  
2 回目以降からの引用箇所 → 岩本他 (2015)
  - ・ 著者が 6 人以上いる場合、初出から第 1 著者名のみを表記し、「他」で省略する。  
最初の引用箇所 → 岩本他 (2015)
- 地の文においてカッコ内で列記する場合  
(例) …だと主張されている (e.g., 野村, 1999)。  
(例) …という様々な立場が存在する (岩本, 1981; 鈴木, 1991)。  
(例) …などのヘッドラインの特徴が見られる (鈴木, 2011)。

### 3. 注、参照文献など

	英語論文	日本語論文
注 (Notes)	・ 注 (Notes) は「参照文献」の前に入	英語論文と同じ

	<p>れる。脚注形式ではなく尾注形式にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 出版年等の情報は「参照文献」で明記し、必要最小限度の情報にとどめる。</li> </ul>	
<b>参照文献 (References)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ References は本文中で引用したもののみを載せる。</li> <li>・ アルファベット順に並べる。</li> <li>・ 共著者の場合、and ではなくアンパサンド(&amp;)を使用する。</li> <li>・ 雑誌は、巻数、号数、ページ数を明記する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 参照文献は本文中で引用したもののみを載せる。以下の①または②のいずれかを選択する。</li> <li>① 英語の文献、日本語の文献を混在させてアルファベット順に並べる（別々に分けない）。</li> <li>② 英語の文献、日本語の文献をそれぞれ別に分けて前者をアルファベット順に、後者をアイウエオ順に並べる。</li> <li>・ 共著者の場合、中黒点(・)を使用する。</li> <li>・ 雑誌は、巻数、号数、ページ数を明記する。</li> </ul>

#### 4. 参照文献の例(参照文献リストのスタイルは、APA style に準ずる)

英語論文	
学会誌掲載論文	<p>Shibuya, K. (2008). Changes of motivational intensity in learning a foreign language – A study of university students in Japan. <i>Studies in English Linguistics and Literature</i>, 18, 1-16.</p> <p>Williams, M., &amp; Burden, R. L. (1999). Students' developing conceptions of themselves as language learners. <i>The Modern Language Journal</i>, 83, ii: 193-201.</p> <p>Pena-Shaff, J., Martin, W., &amp; Gay, G. (2001). An epistemological framework for analyzing student interactions in computer-mediated communication environments. <i>Journal of Interactive Learning Research</i>, 12, (1), 41-68.</p>
単行本中の掲載論文	<p>Shibuya, K. (2015). The developmental processes and patterns of Japanese students' motivation for learning English. In K. Shibuya, T. Nomura, &amp; S. Doi (Eds. ), <i>Vantage points of English linguistics, literature, and education</i>(pp. 133-143). Tokyo: DTP Publishing.</p> <p>Giles, H., &amp; Smith, P. M. (1979). Accommodation theory: Optimal levels of convergence. In H. Giles &amp; R. N. St. Clair (Eds. ), <i>Language and social</i></p>

	<i>psychology</i> (pp. 45-65). Oxford: Basil Blackwell.
単行本、著書	Nomura, T. (2006). <i>ModalP and subjunctive present</i> . Tokyo: Hituzi Syobo. Lightbown, P. M., & Spada, N. (2006). <i>How languages are learned (3rd. ed)</i> . Oxford: Oxford University Press. Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). <i>A comprehensive grammar of the English language</i> . London: Longman.
日本語論文	
学会誌掲載論文	松倉信幸 (2007). 「英和辞典における感情を表す過去分詞形容詞の表記」『日本英語英文学』No. 17, 17-26.
単行本中の掲載論文	山田七恵 (2015). 「時制の一致の教授に対する一考察」渋谷和郎・野村忠央・土居 峻 (編)『英語と文学、教育の視座』(pp. 169-179) 東京: DTP 出版.
単行本、著書	鈴木雅光 (2000). 『例外の文法』東京: 東京精文館 永谷万里雄・清水和子・仙土真由美・松倉信幸・鈴木繁幸・木内 修 (編) (2006). 『言語と文学の饗宴: 岡田春馬帝京大学名誉教授就任記念論文集』東京: DTP 出版.

## 5. 附則

この内規は平成 29 年 1 月 1 日から運用し、*Fortuna* 第 28 号より適用する。

(付記)

この内規は日本英語英文学会 (JAELL) の「投稿論文の書式、参照文献表、注について補足 (内規) (英語教育学論文)」に概ね基づいております。転用を許可して下さいました同学会に御礼申し上げます。

(欧米言語文化学会編集委員会)